

百姓の生き方が 見えてくる田んぼ

評 宇根豊（福岡県糸島市・百姓）

「冬期湛水水田」と「ふゆみずたんぼ」は同じだと思っていませんか。この本を読むと、両者の「見方」がまったく違うことがわかります。冬期湛水水田は行政用語、技術用語です。どうしても人間のためにやる事業や技術になります。一方のふゆみずたんぼは田んぼのため、生きもののためという気持ちで浮上してしまうのです。

岩渕さんのまなざしは時代を超えた世界に届いています。たとえ「湿田」を「乾田化」することは生産性を上げる「改良」だと言われてきました。しかし、あえて湿田を残してきた地域も、百姓も少なくなかったです。

私も秋に代かきしている新潟県の棚田の田んぼを見て納得したことがありました。ふゆみずたんぼは、こうした田んぼに新しい評価

の目を向けています。農政の唱える「進歩・発展」とは違う世界が見えてきて、さわやかです。

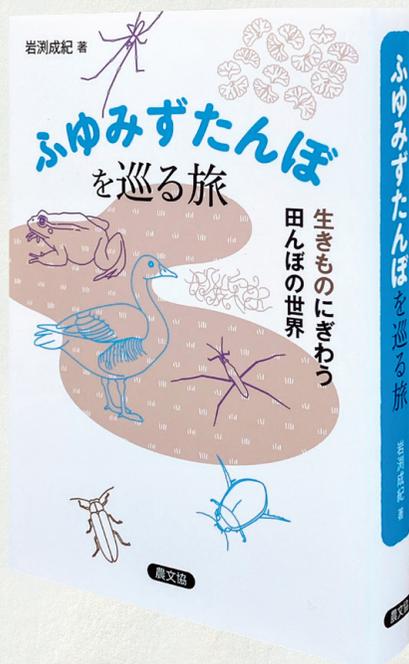
ふゆみずたんぼが人間の有用性にとらわれないのは、生きものから田んぼを見る視点が自ずと生まれてくるからです。ガンやハクチヨウ、トキやコウノトリが田んぼに舞い降りるのはとてもいい風景です。しかし、鳥たちからは田んぼの違いがよく見えているのです。イトミミズやユスリカ、オタマジヤクシやトンボのヤゴは何のため

にその田んぼにいるのでしょうか。百姓のまなざしの向け方を変えさせる本です。

ふゆみずたんぼという新しい衣を着てみたら、農を見る目が変わるよ、と岩渕さんは言っているのです。全国各地のふゆみずたんぼが紹介されていますが、ひとつと

して同じものはないのが驚きです。それは百姓の生き方が違うからです。その生き方の違いを近代的な農業技術から守ってきたものとは何なのでしょうか。

それは、天地自然の生きものと百姓の関係が、時代を超えて伝わってきたもの、未来に伝えて生きなければならぬものを核にしているからです。自身が提唱してきたふゆみずたんぼを、百姓の内側からも語り尽くさんとする熱情に、脱帽します。



『ふゆみずたんぼを巡る旅 生きものにぎわう田んぼの世界』

岩渕成紀 著
農文協 2750 円（税込）